

S-11 東京都および神奈川県内で第2種装置を使用する施設における高気圧酸素治療の現状

小森恵子¹⁾ 檜山英巳¹⁾ 田中進一¹⁾

山本五十年²⁾ 猪口貞樹²⁾

- (1) 東海大学医学部附属病院診療技術部臨床工学技術科
(2) 同 医学科専門診療学系

【目的】日本で高気圧酸素治療(以下HBO)が行われるようになって約40年が経過した。適応疾患の見直しや安全基準の改定が繰り返し行われ、2002年現在全国で732施設、第1種装置が874基、第2種装置は55基報告されている。施設、装置の数量は経時的に記録報告されてきたが、HBOの実情を知るための症例集積は行われていない。

今回は首都圏南部の東京都、神奈川県内で第2種装置によるHBOを行っている7施設を対象に症例集積を行った。治療に条件制約が少なく適応疾患に広く対応できる施設における高気圧酸素治療の状況と変遷について検討したので報告する。

【方法】東京都、神奈川県内で第2種装置によるHBOを行っている7施設を対象にアンケート調査を行った。アンケート内容として、(1)平成13~14年の2年間、(2)平成1~3年のうちの1年間の2つの期間に分けて、それぞれ疾患名・症例数・救急適応/非救急適応の治療回数、平均治療回数を求めた。

【結果と考察】アンケートに対して7施設中6施設から回答を得られ、回答率86%であった。しかし平成1~3年における高気圧酸素治療の記録を保存している施設は4施設であり、全施設に対して適応疾患の変遷をたどることはできなかった。

疾患別に見ると減圧症、末梢循環障害、難治性潰瘍は全施設で、一酸化炭素中毒は1施設を除く全施設において施行されていたがそれ以外の疾患については施設間にばらつきが見られた。症例数では25件~3685件、治療回数については227回~32071回と施設間に大きなばらつきが見られた。施設間のばらつきはその施設の特性に由来することはもちろんであるが、その他にHBOを管理する診療科、施設内他科のHBOに対する関心、知識量にも原因があると考えられた。

S-12 九州・沖縄地区の第2種治療装置についてのアンケート結果より

三谷昌光 八木博司

(医療法人八木厚生会 八木病院)

【目的】九州・沖縄地区の第2種高気圧酸素治療装置を用いた最近の治療状況を把握し、過去(約12年前)と比較して治療数や疾患の変遷を分析、さらには今後の適応拡大への試みや問題点を探る。

【方法】全国共通のフォーマットのアンケートについて第2種装置を有する九州・沖縄地区のすべての施設(16施設、17基)にお願いしデータ収集を行った。アンケートは平成13年1月1日から平成14年12月31日までの2年間の症例および平成1年から3年までの任意の1年間(出来れば平成2年分)の症例について、救急適応と非救急適応にわけて、疾患毎に症例数と平均治療回数を記すものであった。疾患名については、特に指定はせず具体的に記載してもらった。この為多彩な疾患名が記載されたが、分析のために現在の保険適応疾患名に準じて分類し解析した。

【結果】救急適応症例については、1施設あたりの平均で平成2年度が45例、平成13・14年度の年平均が45例と不変であった。非救急適応症例では、前者が130例、後者が123例とやや減少していたが大きな変化はなかった。しかし、疾患構成では脳血管障害が主である所、減圧症の多い所と施設間での差が大きかった。急性心筋梗塞、ショック、スモンに対する高気圧酸素治療はなされていなかった。糖尿病性疾患や重症感染症に対する治療が増加している。多彩な疾患名が記載されていたが、現在の適応疾患には当てはまらない研究的意味合いの強いものも見受けられた。中でも、脳梗塞に対する救急的適応の回復、顔面神経麻痺や高ビリルビン血症(肝移植後を含む)に対する適応追加が望まれるが、これについては、学会主導による質の高いevidenceの確立が重要と考える。